

鉄砲^{てっぽう}百人組^{ひゃくにんぐみ}とつつじ

江戸時代、大久保はつつじの名所として知られていました。当時のようすがうかがえる随筆「遊歴雑記(ゆうれきざっき)」〈文化11年(1814)刊〉には次のように書かれています。

大久保百人町の組屋敷(くみやしき)北の通りに、飯島武右衛門(いいじまぶえもん)という同心(どうしん)がいて、その屋敷にあるつつじが有名でした。家の庭には大小のつつじ二~三十株が植えてあり、その色や形は実にみごとです。裏庭にまわると、一面つつじが植えられています。木の高さは八、九尺か一丈(約2.4~3m)、低くても三尺から五、六尺ほど(約0.9~1.8m)で、庭の左右に数千本あり、植えられている庭園の幅は東西八間(約14.7m)、南北およそ二丁(約218m)という広さです。

中にあるのはすべてつつじです。季節としては、立夏より四、五日の間がもっともすばらしく、花が咲きそろったときには見ている人の顔の色も紅に染まったようです。諸大名の奥方も集まり、この組屋敷内で一日中酒を飲み、遊んでいきます。

家々の垣根にも、すべて琉球(りゅうきゅう)つつじが咲いており、東の木戸から西の木戸まで、西側の垣根に咲く花のふぜい、垣根ごしには燃えるようなつつじのようすが見えました。しかし、家々にどんなつつじの大木があっても、飯島武右衛門のものにはかないません。

このように、飯島武右衛門のつつじは特に有名となり、江戸中の花の名所を記した「江戸名所花暦」(えどめいしよはなごよみ)にも登場しています。内職だったつつじの栽培は、すでに江戸中に知れ渡るほど有名になっていたのです。そして、この名所を造り出したのは、ほかならぬ大久保の鉄砲百人組の武士たちだったのです。



大久保つつじ園

「江戸名所図会」より

注: てっぽうは鉄砲とも書きますがパンフレットでは常用漢字表記の鉄砲で統一しました。